キズナエピソード

遊部 いろは　1話

//ヴィジュアルノベル形式開始

悪魔どもとの激しい戦いに勝利した俺たち。

そんな時、俺はいろはに話しかけられた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

［いろは］

「ねえねえオムオム！

なんか困ったことがあったら、

遠慮~~なんか~~しないであたしに言ってね！」

［オムニス］

「お、おう……。

今のところ困り事はないぞ」

［いろは］

「毛玉の処理とか大丈夫？

おトイレの後にちゃんとあそこペロペロしてる？」

［オムニス］

「そういうデリケートな話はやめろ。

ていうか、なんでそこまで気にかけるんだ？」

［いろは］

「だって、誰かが困ってたら、

放っておけないじゃん！」

［オムニス］

「……！」

［いろは］

「あれ？　どしたのオムオム？」

［オムニス］

「……なんでもない。

ほら、さっさと行くぞ」

//ADV形式終了

//暗転

//場面転換：白い部屋

//ヴィジュアルノベル形式開始

白い部屋に戻って来た俺は、感慨深くため息を吐いた。

「誰かが困ってたら、放っておけないじゃん！」

この言葉に強い既視感を覚える。

まるで学生時代の青春の匂いが思い起こされるような、

そんな感覚……。

そんな時――

//ページ切り替え

突如として、俺は耐えがたい睡魔に襲われる。

視界がぼんやりとしたモヤに包まれる中で、

俺は知りもしない記憶を垣間見た。

それは、新学期の始業式……。

いきなり遅刻してくる女生徒の姿だった。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//都立有羽・体育館

［とびお］

月日が立つのは早いもの。

長期休暇が始まったと思ったら、、

あれよあれよという間にもう始業式だ。

［とびお］

俺を含めて生徒たちは体育館に集まって、

校長先生のありがたくないお話を聞こうと

静まりかえっていた。

［とびお］

校長は一度咳払いをしてから、大きく息を吸い込む。

［いろは］

「よかったー。間に合ったー！」

［とびお］

そのタイミングで、元気な女の声が

入り口から響き渡った。

［いろは］

「……あ、あれ？

もしかして、もう始まっちゃってる？

やっば～」

［とびお］

どうも、始業式早々、遅刻してきた奴がいるらしい。

俺も遅刻はよくしてしまう方だが、

こういう節目の日に遅刻するというのは相当だ。

［とびお］

世の中には変わった奴がいるんだな。

その時は、そうとだけ思っていた。

//暗転

//都立有羽・教室

［いろは］

「あたしは遊部いろは！　いろはでいいから！」

［とびお］

心機一転の席替えを終えたとき、

俺の隣になった女生徒は、元気にそう自己紹介してきた。

［とびお］

「あ、お前って、遅刻してきたやつ……」

［いろは］

「あ、ばれた～。

いやぁ、間に合ったと思ったんだけどなぁ」

［とびお］

まさか同じクラスだったとは。

挨拶程度でしか言葉を交わしたことがなかったので、

全然気づかなかった。

［とびお］

そうか。

俺のクラスに、こんなおもしろいやつがいるのか。

始業式の一件で俺は少しだけ、いろはに興味を持っていた。

［とびお］

「俺は量とびお。よろしくな。

ところで、一つ聞いていいか？

今日は、なんで遅刻したんだ？」

=========================スチルカットシーンA開始=========================

［いろは］

「いやぁ、迷子の小学生がいたからさ。

学校まで送ってあげたの！」

［とびお］

「へ？

……それで遅刻したのか？」

［いろは］

「そうだよ！

だって、誰かが困ってたら、

放っておけないじゃん！」

=========================スチルカットシーンA終了=========================

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

なんともあっけらかんと言う彼女。

今時の若者にしては……もっとも俺も今時の若者だが、

それでも珍しいお人好しだ。

おもしろいヤツだ。

改めて俺はそう思った。

目の前の遊部いろはに、親しみを感じていた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//1話END